【香川アイスフェローズ賞】

変える

高松市立紫雲中学校　三年　苅田隼人

皆さんは「中国」という国にどのようなイメージを持っていますか。よく知らず、悪い印象をもってしまっている人もいるかもしれません。僕も最初は偏った見方をしていましたが、今年の三月に中国を訪れる機会があり、中国に対するイメージが大きく変わりました。

僕は、高松市訪中親善訪問団の一員として中国を訪ね、文化交流や中国の方とかかわりました。報道だけで知る中国を見るとあまり良いイメージを持てないと思います。しかしこれはごく一部の人を報道したものにすぎません。日本にも良いことをする人もいれば、悪いことをする人もいます。それと同じように報道の裏側の中国はもっと優しく、助け合う心を持っている人であふれています。これは、僕が実際に中国を訪れ、自分の目や耳で見たり聞いたりしたことで、心の底から感じたことです。

中国を訪れ、最初に感じたことは、「遠慮がない」ということです。人と人とが話しているときに話しかけること、それは日本のマナーからすれば、あまり良い印象を持てないでしょう。ですが、過ごしていく中でそれは中国では当たり前のことであり、そして文化でもあると感じました。「遠慮がない」「気が強い」ということは言い換えると「積極性がある」と捉えることができます。この積極性こそが、僕が中国で多くの友達を作れた一つの要因でもありました。

次に、「笑い」のすばらしさを改めて実感しました。この訪問中に価値観も文化も違う中国の人たちと何度笑い合ったことでしょうか。実際に外国語学校では、多くの笑いが生まれました。特に、外国語学校で夕食に招待されたときには、片言の英語や翻訳アプリを使い、会話

しました。そこで、学校生活の様子や恋愛事情を聞くと、涙が出るほど面白い回答が返ってきて、お互いの仲が、より深まりました。それにより、言葉を超えてのコミュニケーションをとることができ、同級生のように仲間に入れてもらうことができました。外国語学校の生徒であり、親友でもあるＬＡｗとＦＲＡＮＫとは、今でも連絡を取り合い、今年の八月に僕の家にホームステイに来てくれました。このようなことから「笑い」は世界の共通言語というべきだと思います。「笑い」というのは、心と心が通じ合い、信頼し合うことの証だと確信しました。

しかし、これらの笑いにはしてはいけない笑いがあります。それは「人を笑う」ということです。人の外見を笑ったり、行動を笑ったり、そんなことは決してしてはいけません。笑っている人は、何も感じないでしょう。けれども、笑われた人は心に大きな傷を負います。そしていじめにつながります。謝っても済まされない事故につながることもあります。そんなことが起きる前に相手の立ち場を考えること。それがとても重要だと思います。話は戻りますが、僕は中国へ行って、計り知れない程の驚きと感動を覚えました。中国という、行くまで分からなかった未知の国と僕の大好きな国である日本との文化は、互いにすばらしいものであり、未来に残さなければいけない文化であると実感しました。しかし、歴史的背景もあり、その文化の違いによって偏見というものが日中間で生まれていると思いました。

その偏見をなくす。それは現実には難しいこともあります。しかし、その偏見の内容、つまり、人を捉えるときの基準を「変える」ことはできると思います。そしてその基準は自分たちを基準として考えるのではなく、実際に目で見て、多くの人と関わり、違う見方をした上で考えを持つことが大切だと考えます。何も知らないうえでの偏見というのは、とても危険です。その自分勝手な考え方が家族、友達、イン

ターネットでつながった人など、いろんな人に世代を越えて伝わります。そうすると、そのことがいじめや差別、もしかしたら戦争にまでつながっていくかもしれません。けれど、今の世代の僕たちはその偏見を変えることができます。実際にＬＡＷとＦＲＡＮＫが高松に来たときに、あかね温泉に行きました。そのとき、偶然同じクラスの人と会い、交流を図ることができました。その人は、「中国に対する意識が変わった」と言っていました。そして、ＬＡＷとＦＲＡＮＫも、「Ｉ　ＬＯＶＥ　ＪＡＰＡＮ．」と言っており、お互いの見方を「変える」ことができました。このように、僕たち中学生が「変える」という輪を広げていくことがこれからの時代に大きな影響を与えることを確信しています。人生というのは、あっという間です。僕はこの人生の中で多くのことを自分の目と耳と心で学び、日本中、世界中にいろいろな国の文化の素晴らしさ、人の素晴らしさを発信していきたいです。僕らが国の壁を越えてつながれたように、世界はもっとつながっていき、もっと良くなる、いや、皆で良くしていきます。